

3128 年賀状のモチーフ：2017年は何を

酉年、新年、朝日、モチーフはいろいろコレクションしているものの選択に悩む。

伊勢神宮で飼育されている白色の「にわとり」、手入れされていてその姿は見事、使用すれば私だけではないだろう。

それでは面白くない。久楽しい画像は？ 結果、スイスのマッターホルンの画像を選択。

「蝸牛、登らば登れ 富士の山」 富士の山をマッターホルンに置き換えて。

久楽の夢紀行：世界の朝の風景シリーズ、春夏秋冬、訪ねているが、空気が澄んでいる冬場が最高。

思いつくままに、マッターホルンの文章の記録が出てきた。

日本なら富士山、中国は黄山、欧州なら、マッターホルン、4478メートル。

その雄姿は憧れの的だった。夏に何度かチャレンジしていた。くつきりとはいかない。

やはり厳寒の冬場、夢に描いていた。マッターホルンご来光の瞬き。

念願が叶った。冬場ゆえの光の鮮明さ。豪雪で思うようなポジションが得られない。

私の立つ位置は、標高 3300 メートル。夜明け前は真っ暗、

いや、天空は青かったかも。ぼんやりと眼前に見えていたように思う。

まもなく憧れの光景とご対面！ ワクワクしたものだ。明るくなるにつれて雪の白さが

目に飛び込む。足元はアイスバーンもあれば、柔らかな雪もある。

靴はアイゼン。頭上にライト。身は重装備の防寒具。寒さも忘れて時を待った。

心は熱く燃えている。人影なし。誰もいない。たったひとりの夢冒険。

吐く息も白い。物音一つしない静寂。底深い静寂があるとは思ってもよらなかった。

静けさや、岩に染み入る、蟬の声。我身の息づかいが耳に響く。

直感で、ベストポジションを確保し、足元の雪を固めた。固唾をのんで待った。

身体と心と呼吸を整えて。まもなく、左方向が少し明るくなり始めた。

つづいて、左端の低い山の頂が、赤く輝き出した。

天空ショーの始まり。ピアノの鍵盤をたたくように、順番に左方向から右へ、リズム良く、陽光が鋭角の峰々を赤く染める。まるで、白い雪の中を、赤い光が走るよう。スピードが増して来た。白い雪とのコントラスト。

まだ、直接には陽光は見られない。突然、マッターホルンの頂上が点灯。左下の山かげから、頂上をめざし一筋の閃光。スローモーションのようなスピードで、陽光は、マッターホルンの頂上から下へと染め上げる。

息をのむどころではない。息をするのも忘れて、またまた固唾をのむ。感動の極み。ラッキー、スマイルオンミー。ご来光マッターホルンとのご対面！夢に描いていた光景が眼前に展開、正夢である。寒さのせいではない。ゾクゾクした。

苦勞してベストポジションにたどり着いたおかげ。立つ位置も恵まれた。何ともラッキー。厳しい急坂を峠まで登りきってこそ、素晴らしい素敵な景観が見られるというもの。

やがて、陽光の暖かさとは別に、重装備の身体が極度に冷たく感じて来た。これはやばい。夜明け前が一番冷え込む。指先だけ出す手袋をしている。もうすでに、指の感覚が遠くなりつつある。どれだけ時間がたったのだろう。

行きは良い良い、帰りは怖い。こうした瞬間があるから、常に危険と背中合わせ。緊張感を持って全力投球。前夜、山小屋に宿泊していたので、戻る距離も遠くない。近い遠いもあるが、道なき道に入り込んでいる。

帰り道の状態が問題。ベストポジションを確保するために、少し脇道に逸れている。夢中で移動したのか、気がつくと、重装備で腰まで雪の中へ身体も沈み込んでしまっている（続く）

こんな状況下での取材画像。たかが… 別な作品、最高3mX2m、の作品化したことがある。やはり迫力がある。和紙夢絵に表現するのはどうか。当時の技術では、いろいろ課題と問題があった。話が横道に。この文章の続きを心模様3129に。画像は、年賀状と後日。